

地域包括支援センターでの哲学カフェ:

なぜ「死」や「老い」を語ることができるのか?

2020.9.8

鈴木径一郎（大阪大学共創機構特任助教）

はじめに

「一人ひとりの死生観と健康自律を支える超高齢社会の創生」PJでは、「**哲学カフェ**」という取組みを近隣地域で継続的に実施している。

- ✓2017年から30回以上開催。
- ✓箕面市の地域包括支援センターでは毎月一回開催（コロナで休止中）。
- ✓参加者同士で「死や老い」についても、楽しみながら話している。

なぜ、ここでは「死や老い」について話すことができるのか？

哲学カフェって？

対話イベントの一種。
問いやテーマを立てて
コーヒーなどを片手にリラックスして、
参加者同士の対話を楽しむ。

哲学史の知識は必要ない。

フランスで偶然的に始まる
日本での普及の源流のひとつは大阪大学
最近は高校倫理の副読本にも記載が



なぜこのプロジェクトで哲学カフェを？

プロジェクト名：

「一人ひとりの**死生観**と健康自律を支える超高齢社会の創生」

端的に言えば、

「一人ひとりの**死生観**の自律」のためのとりくみ

なぜこのプロジェクトで哲学カフェを？

このプロジェクトの仮説：

私たちは、健康寿命増進のための活動をする（死や病気や老いを遠ざける）

だけでなく

もう一方で、死や、老いを受容していく（生きていく）準備をする必要がある

しかし、わたしたちは、自分の死や老いを考えることがあまりできていない
自分の死や老いを語る言葉を見つけられていない

→死や老いについて自ら語りあって、自分の言葉を見つけていく機会をつくろう

→それが、「一人ひとりの死生観の自律」につながっていくのでは

箕面市での哲学カフェの様子・特徴



「地域に高齢者のための、
様々な種類の居場所があってよい」

- ◆ 地域の訪問看護ステーションが主催
- ◆ 地域包括支援センター敷設のコミュニティカフェで毎月開催
- ◆ 平日14時から1時間半
- ◆ コーヒー・お菓子付き（でも無料）
- ◆ 「高齢者」を中心に15名程度あつまる

- ◆ その日の問い・テーマは当日に進行役が提示
- ◆ 円になり、みんなが話す

死や老いにまつわる語り

- 「災害」がテーマだったときの語り（2018年の夏頃）
「この天井を突き破るのかどうか」
- 「理想の死に方について、みんなと話したい」

- パートナー他との「死別」の話
- 老いと関係性の変化の話
- 日常の不自由の話
- 朝起きたときのやる気の無さの話

なぜ死や老いについて語れるのか？

- そもそも、各人にとってある程度関心のある問題だから（必ずしも一番の問いでは無いにしても）

とはいえ、

たとえそれが自分にとって関心のある問題でも、われわれは、どこでもそれについて話すわけではない。

われわれは、どんなときなら自分の関心をのせて話せるだろう？

なぜ自分の関心をのせて語れるのか？

- ここでは、それがその日の問いやテーマについての回答であれば、（死や老いの問題を含め）様々なことがらについて、自分の見解を話しても不利益は無いし、むしろ、他の参加者から、関心をもって話を聞かれることがわかっているから。

なぜそれがわかっているのか？

- これまでの参加によって、集まりの主旨（あくまで対話を楽しむ場であること）を、実際に経験して理解しているから。
- 自分が（死や老いを含め）様々な問題について他の人の話を聞いて、それぞれの関心や見解を面白く感じることができているから。

なぜ敢えて自分が語るのか？

- 正解の決まっていること、「落とし所」が決まっていること
→ 答え甲斐がない
- 回答に有用性が求められる場合、回答が何かを決める場合
→ 気後れする
- 時間がない場合、誰かを押しつけなければならない場合
→ 気後れする

対話の形式が示しているもの

• 全員が話すという形式を取ったことは重要だった

→各人の見解や関心がそれぞれに面白いということがわかる

→自分の見解や関心を語ることについても不安がなくなっていく

→形式自体が各人への期待を示す

とはいえ、話したくない人もいるのでは？

←各人が、自分の意志で集まって来ているから振りやすい

コロナ下で . . .

この哲学カフェはオンライン開催の計画は無し

- この哲学カフェについては、集まること自体も大事だった
- 人と会いに出かける予定があるということ
- 人と会う、ということと、対話を喜ぶということ